

歌誌 黄雞「夏号」投稿歌

山形 黒沼 貞志

歌題 アンソロジー 2010～2015

雪搔きで痛めし腰を庇いつつ通う院内社会の縮図

ブナ林見つけし倒木苔むせり馳せる想いを拒みし歲月

玄関へ所移して競い合う紅き水引白き貴船菊

雪冠ぶる月山葉山に見守られ若人競う食の祭典

親子連れ花に囲まれ高原の初夏の一日思い出づくり

木道の片方に際立つ蒼と白連れ合いのごと寄り添うりんどう

ゲレンデの広さをひとり手に入れて心ゆるみし秋の野遊び

山径の赤き実を指し妻の言う 自然の中で見るが一番

立冬の薄墨色の宮の庭古木の黄落夕日に煌めく

公園の花散り残る道端の人の気配をかもす自転車

石を割る桜の力仰ぎ見ん想い及ばぬ長き歲月

恥じらいの色を秘めたる紫陽花の言はで思ふぞ言ふにまされる

世の中に名の無き草は無いと云う路肩に蔓延るあまた草あり

棲みつきし古刹の池の錦鯉水藻に隠れて尾びれ隠さず

若者の群れる松島瑞巖寺雑誌翳してインスタのはしり